

「聖霊降臨日を祝おう！」（ヨハネによる福音書20:19-23）

聖霊降臨日、おめでとうございます！けれども、少し残念さが拭えません。なにせ、今日は東京聖テモテ教会と東京諸聖徒教会合同でお祝いする予定だったのです。緊急事態宣言が解除され、もう少しで皆で礼拝ができるかと期待していますが、今日、共に集い、祝えないこと、残念です。しかし残念なのは、そればかりではありません。聖霊降臨日はもちろん三大祝日です。しかし、クリスマス、イースターに比べて、ペンテコステはどうやらどの教会でも少し扱いが小さいように感じられるのです。このことが何よりも残念です。クリスマス、イースター、創立記念日には祝会の予算がとられているのに、聖霊降臨日がない。それはいかん、ということで聖テモテ教会では今年からペンテコステ献金という封筒を作り、皆でペンテコステの出来事に心を備えたいと計画していました。COVID-19の影響で、それも叶わなかったわけですが、しかしどうしてでしょうか。どうしてペンテコステは他の大祝日に比べて少々盛り上がり欠けるのでしょうか。ここは皆さんに聞かかけたいと思います。なぜわたしたちは今日を祝うのでしょうか？

やはり、これはまず何よりも主イエスがわたしたちを孤独にはしておかなかった、ということがあるので。ルカによる福音書で、主イエスは弟子たちに向かって約束されました。「わたしは、父が約束されたものをあなた方に送る。高いところからの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」今日の使徒言行録。弟子たちはこの約束の時を待って祈っていました。いよいよ約束の時。突然「激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響き」ました。弟子たちに吹き荒れたのは、圧倒的な神の力でした。聖霊を受けた弟子たちは、それまでこもっていた部屋から外へ出て、神の救いの業を世界中に宣べ伝える新しい人間へと造り変えられました。よく考えてみてください。あの弟子たちです。裏切って、情けなくて、だれが一番偉いかなどと言い争ってしまう、そういう情けない弟子たちです。しかし、聖霊は、弟子たちのあの弱さや情けなさ、罪深さを猛烈な力で吹き飛ばし、全く新しい命へと造り変えてしまったのです。

弟子たちは主イエスの昇天後、どれだけ寂しかったことでしょうか。心細かったことでしょうか。しかし、主イエスは弟子たちを放っておくことはなさらなかった。弟子たちを決して孤独にはされなかった。聖霊を遣わし、さらに聖霊によって彼らを造り変え、立ち上がらせ、神の救いを証しするものへと変えてしまったのです。この聖霊を受けた弟子たちを通して教会が誕生しました。そして教会は弟子たちの働きを引き継ぎ、聖霊の導きのもと、世界中に広がり、わたしたちの生きているこの時代の、この場所にまで福音が届けられているのです。わたしたちが主イエス昇天から2000年後のこの東京で、あの日誕生した教会に集められ、神の家族とされているということ。この事実こそ、驚くべき聖霊の働き、神の業にほかなりません。わたしたちはまさに、聖霊によって生かされ、脈々と連なる教会という命の中で生かされている。主イエスはわたしたちをも決して孤独にされず、こうしてわたしたちを聖霊によって、命の群れに連なるものとしてくださった。だからこそわたしたちは聖霊降臨日、この聖霊の力にあらためて驚きつつ、祝うのです。

さて、このことは同時に、わたしたちにもこの教会という命の群れ、命の営みを人々に繋げていく役割を与えられているということでもあります。ここに、今日という日を祝う、もう一つの理由があります。今日は、主イエスがわたしたちに使命を与えられたことを憶え、あらためて聖霊の助けを求めて歩み出す日でもあるのです。聖霊の働きとは、今日の使徒言行録、ヨハネによる福音書に見れば明らかのように、神と人、人と人とを結ぶ力に他なりません。聖霊を受けた弟子たちは、「霊」が語らせるままに、他の国の言葉を語り出し、神の救いの業を世界中に宣べ伝えるように造り変えられました。聖霊降臨の出来後は、バベルの塔の回復の出来事だとも言われます。神に成り代わろうとした人間の言葉を神が分けられ、人を散らされたのがバベルの塔の話です。それとはまったく逆に、聖霊降臨は、分けられた言葉を弟子たちが語り、人々が再び同じ福音のもとに結ばれる出来事です。再びすべての民が神のもとで生きるように、神を愛し、人を愛して生きるようにと、弟子たちは遣わされていくのです。そして、そこに教会が誕生し、世界中に福音が届けられることになる。さらに、今日のヨハネによる福音書では、ご復活の主イエスが弟子に息を吹きかけられ、「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ赦されないまま残る。」とおっしゃいます。罪とは、神から離れることです。罪の赦し

とは、再び神との関係の中で生かされることです。これこそ、主イエスがなされた和解の業です。神と人、人と人とを再び結ぶ役割。聖霊を受けなさいと、息を吹きかけられた弟子たちは、主イエスがこの世でなされたその役割、和解の業を担うことを任せられたのです。使徒言行録も、ヨハネも、聖霊は神と人、人と人とを結ぶための力であり、聖霊が注がれた弟子たちはその和解の務めを果たすために遣わされるのです。そして、その弟子たちから教会を通して脈々と受け継がれたその和解の業を担うようにと、わたしたちも召されているのです。そう聴くと、そんなこと、わたしには出来ないと不安に思う方もおられるかもしれません。しかし、不安になる必要はないのです。あの弟子たちと同じ聖霊を、わたしたちも受けているからです。ヨハネによる福音書の別の箇所、主イエスはこう約束されています。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。」ここで言われている弁護者こそ、聖霊です。この弁護者と訳されている単語は、ギリシャ語で「パラクレートス」という言葉です。これは、この真横に呼ばれたもの、誰かを助けるためにここに呼び出された者、助け手を意味します。この「パラクレートス」について、主イエスはこう言います。

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

「弁護者」なる聖霊は、どこか遠くにいて働くのではなく、この地上にあって、まさにわたしたち一人ひとりの真横にいて、わたしたちにすべてのことを教えてくださる、主イエスの言葉を思い起こさせてくださる、というのです。しかも、永遠にです。弟子たちと同じようにわたしたちにも聖霊が伴っていてくださっているのです。自転車にはじめて乗ったときのことを皆さんは覚えていらっしゃるでしょうか。わたしは実家の近所の城北公園という大きな公園で、父と練習したことを覚えています。グラグラしてしまって、とても怖かった。はじめは父が横から支えて走ってくれたり、後ろを抑えながら走ってくれました。そうして繰り返し繰り返し支えられ、一緒に走ってもらっているうちに、なんとかバランスを覚え、自分で走れるようになりました。弁護者なる聖霊はまさに、あのときに助けてくれた父のような存在ではないかと思うのです。わたしたちの信仰の歩みも、自分の力だけで歩もうとするならば、すぐにバランスを崩してしまい、転んでしまいます。主イエスがなされた和解の業を担うなど、わたしたちだけの力では決して出来ません。主イエスはそんなわたしたちのことをよくご存知です。だからこそ、聖霊をわたしたち一人ひとりに遣わしてくださったのです。わたしたちが自転車に乗りたいと願うように、主を信じて歩みたいと願うなら、聖霊が必ず助けてくださる。どんなに偉大な聖人も、どんなにこの世で悪人とされた人にも等しく、神は聖霊を遣わしてくださっています。だから、わたしたちは、大丈夫なのです。わたしたちが神に向かって歩もうとするなら、その聖霊が必ず伴い、何度転んでしまったとしても、起こし、並走し、教え、導いてくださる。そうしてなんとか、わたしたちは務めを担うことができる。

今日はその聖霊の助けをあらためて求め、聖霊に満たされ、信仰の歩みを新たにする日です。この教会という命の中で生かされ、この信仰を繋げる使命を担っていることをあらためて自覚する日です。しかし、その歩み中で、わたしたちは必ず困難に直面するでしょう。でも、大丈夫なのです。聖霊が必ず助けてくださるからです。今日の福音書で、ご復活の主イエスが裏切ってしまった弟子たちのなかにあらわれ、「あなたがたに平和があるように」といって、息を吹きかけてくださったように、主イエスは必ずわたしたちの間に立ち、平和を宣言し、何度でも赦し、息を吹きかけてくださいます。必ず、聖霊が伴ってくださいます。この聖霊が降った、わたしたちの隣に降った。今日はそのことをお祝いする日です。そういう意味では、わたしたちにとって、もっとも大事な祝日とさえ言えるのです。今日はわたしたちにとって本当に大切な日です。どんなときにも、聖霊がわたしたちと伴ってくださいます。主イエスの約束が実現したこの日を心から祝い、聖霊のみ助けを願い、あらためて聖霊に満たされ、赦され、神の和解の業をこの世に広めるために遣わされてまいりましょう。